平成七年度　特別研修員研究発表要旨

『唯信鈔文意』改訂とその背景

御手洗　隆　明

『唯信鈔文意』は、親鸞が、初期真宗教団がおかれた危機的状況に対応して著した仮名聖教の一つである。この著作には、書写年時の明確な計五本があり、これらは真蹟本系・流布本系の二系統に分類されている。この二系統間に限らず、諸本には増補・削減といった異同があり、それによって親鸞の思想展開が見受けられる箇所もある。これらの改訂を、親鸞の文書伝道における思索の再展開の一つと位置付け、この内実を窺うことが今回の目的である。

『唯信鈔文意』について、まずこの書の改訂時期が、初期真宗教団が動揺する時期と重なることに注意しておかねばならない。この教団の危機的状況の要因として、善鸞の異義事件があるのだが、これについては彼の支持者が『唯信抄』を曲解していた可能性があること、『唯信抄』や文意類が善鸞の異義を抑止できず、門弟達が本願を棄てる結果となったことが知られる。この問題の解決策として、結果的に親鸞は善鸞を義絶するのだが、同時に教団内に残った本願への疑いを払拭し、また念仏共同体を結束させる方向性を示す必要があったことが考えられる。これを『唯信鈔文意』が改訂される背景として捉えておく。

親鸞八十五歳の時に著された真蹟系・流布系の二つの写本における、『唯信抄』所引の「観音勢至自来迎」、「聞名念我総来迎」の、それぞれの、特に来迎についての了解は独特である。来迎は元々、いわゆる臨終来迎をいうのであるが、親鸞はこれを非本願の行者による諸行往生として退け、本願の行者は現在において往生を得ているのであるから、臨終来迎を必要としないことを明言する。そして来迎について二つの了解を示す。

①観音勢至ら浄土の菩薩が現生において行者を護念するという諸仏護念の益。

②行者に「キタル・カエル」を実現する「若不生者・願生彼国」という本願の力動性。

親鸞は、本願の慈悲の平等性において、来迎を死の概念から解放し、現生において往生を得た本願の行者、すなわち現生正定聚の内容として捉え、来を行者を浄土に「キタラシメル」、つまり必ず涅槃に至る仏道にたたしめる誓願である至心信楽の願を現す語として了解する。また、迎についても同様に、至心信楽願成就文を現す語として了解するのである。

このように、臨終来迎を期する諸行往生、死後に極楽浄土へ行くという、未来往生に力点を置いた浄土教の伝統を親鸞は継承しながらも、未来・臨終の問題を現在にまで引き戻し、現生での本願力としての来迎による得往生を語るという、独特の了解をなす。親鸞の語る「往生を得る」とは、凡夫が名号のはたらきにより、如来の願心を信心として獲得し、その身のままで必ず无上涅槃に至るという仏道に立つ、即ち正定聚不退転の位につくということである。

この往生観の裏付けとして、親鸞は『唯信鈔文意』において来迎を即得往生として示すが、これが流布本になると、本願の行者

の存在がより鮮明に語られてくる。流布本では、親鸞が往生を語る場合の基本語である正定聚、成等正覚が付加され、更に本願の行者を弥勒と同じと表現している。この思想は、信心獲得により弥勒と同じ位に立つ、この現生で往生を得るという果を、大乗菩薩道の一つの到達点である等正覚の位、即ち弥勒菩薩と同じ位に行者が立たしめられることとして了解し、更に信の獲得、即ち真実信という因にまで遡って、諸仏如来より同一なる信心を称讃されることを根拠に如来と等しいとまで主張するもので、当時親鸞が最も強調していた教説である。このように見ると、流布本が真蹟本よりの改訂であるとした場合、善鸞の説いた第一八至心信楽願を奏める花とする見解を否定し、本願に対する疑いを払拭せんとした意図があったことが窺える。

「総迎来」の来・迎についても、親鸞はほぼ同様の了解を示すが、この現生での来迎について、来については行者を必ず涅槃に至らしめる、「キタル」を実現する誓願のはたらきと見、同時に「カエル」という、生死海への還帰にまでの展開を実現するとも了解していることは注意される。「自来迎」においての、従来の読み方では、ここを曇鸞のいう往相還相の二種回向と重ね、本願の行者が得るべき証大涅槃のさとりは、行者が他者を救済するという普賢の行にまで展開する、となる。ところが「総迎来」において、特に流布本では『大経』下巻の「従如来生」の文を引き、また「キタル」を敬語に読み替え、如来の具体的な活動として説き示す。

如来が涅槃を出て、衆生利益するというのは、浄土の菩薩による還相利他の活動に他ならないが、この箇所は諸本に特に異同が多い。そこで再度この時期の親鸞の活動に注目すると、彼を回心せしめる縁となり、その仏道を支えた法然・聖徳太子という、勢至・観音と仰ぐべき二人の菩薩の伝記・和讃を制作していたことがあるが、これと重ねて考えることはできないであろうか。親鸞は、法然には自らの仏道を証誠する諸仏の具体相を、太子には末法の世に仏教をもたらし、仏敵と闘った英雄像を、更に親鸞は両者に応化した浄土の菩薩という意味をも内観していたのではないか。

このように考えると、『唯信鈔文意』の改訂点からは、現生に往生を得ることを正定聚不退転として強調すること、同時に「従如来生」という、浄土の菩薩による還相摂化として具体的に把握しようとしていることなどから、親鸞が本願の了解の再展開を精力的に行っていたことが窺い知れる。